

展示会場の様子



展示項目

1. 写真と解説文

2020年1月から12月までの主な出来事（生きものの記録と行事）の写真と解説
次のページ以降に、生きものの記録と解説文を掲載しました。

2. 動画

テレビ岸和田作成の「二色の浜の生きもの」を大型モニターで放映しました。
調査者は、自然遊学館の山田浩二のほか、きしわだ自然資料館、大阪自然環境保全協会、
大阪府立大学のスタッフも参加し、ナレーションは自然遊学館の山田浩二が担当しました。

3. 寄贈標本等

2020年に採集されたせんごくの杜や海の生きものの標本、および寄贈標本を展示しました。
丸山幸代さん作成の二色の浜の貝殻のオブジェも展示しました。

4. 漂着物しらべの結果

2020年に二色の浜においてボランティアを募って行った漂着物しらべの結果を展示しました。

1. 写真と解説文

以下で紹介する生きものと行事の写真は、すべて貝塚市内で撮影されたものです。それぞれの出来事について、タイトル、撮影日、撮影場所、1行コメント、分類群（目と科）、解説文、写真、撮影者を示しました。撮影者名がない写真は自然遊学館の職員が撮影したものです。

チョウセンカマキリ・・・2020年1月24日、二色

冬のカマキリ

カマキリ目 カマキリ科

秋から冬にかけて、平均気温と最低気温ともに非常に高く、10月から1月にかけての気温の月平均値は、1992年-1993年の暖冬以来のものでした。チョウセンカマキリの成虫はふつう、12月の中旬にはすべて死んでしまうのですが、渡辺波玲さんが二色で採集したメスは、当館に持ち込まれた時にまったく弱っている様子はありませんでした。



チョウセンカマキリ

シマフグ・・・2020年1月31日、二色の浜

標本のような状態

フグ目 フグ科

ヒレの橙色と、背から尾にかけての縞模様が特徴のフグです。フグなので毒はあります。川口博さんが二色の浜で打上げ個体を採集してくれました。外傷もなく、すぐに標本写真が撮れる状態でした。二色の浜では、クサフグが一番多く、その他、ヒガンフグ、コモンフグ、ハコフグ、コンゴウフグが確認されています。



シマフグ

アカガシラサギ・・・2020年2月24日、千石荘

198種目の鳥

ペリカン目 サギ科

ササゴイに似て、長い嘴が特徴の一つです。本土でも少し繁殖例があるようですが、基本的に旅鳥です。北に向かう途中に千石荘に立ち寄ったものだと思います。撮影者の藤村雅志さんによると、その後、熊取町七山北の方に飛んで行ったそうです。自然遊学館がまとめた貝塚市の鳥類リストになく、198種目の記録となりました。



アカガシラサギ
(藤村雅志さん撮影)

キンクロハジロ・オオバン・カイツブリ・・・2020年2月24日、千石荘

3種がそろう

和田太一さんを講師にむかえて、午前中は千石荘でバードウォッチングの行事を行いました。カメラ係の山口隼平さんが三ツ松のカンコ池で撮影したものです。手前のキンクロハジロと右手のオオバンを狙っていたら、後ろにカイツブリが浮かんできたそうです。千石荘では36種、午後からの近木川河口では30種の鳥類を見ることができました。



カイツブリ（奥）・オオバン（右）
キンクロハジロ（手前）
（山口隼平さん撮影）

ムネアカアワフキの幼虫巣・・・2020年3月12日、馬場

桜の枝先にカタツムリ？

カメムシ目 トゲアワフキムシ科

植栽のソメイヨシノの枝先の花芽が膨らむころ、その近くに、カタツムリの殻のようなものが付いているのを見かけることがあります。カイガラムシと間違いそうですが、これはムネアカアワフキの幼虫が石灰質を分泌して作る巣で、この中に幼虫が隠れています。成虫はセミに近い仲間ですが、左右対称なのに、幼虫はこのような巣をつくるのは不思議です。



ムネアカアワフキの幼虫巣

カラマツガイ・・・2020年3月13日、二色の浜突堤

黄色い春の風物詩

有肺類 カラマツガイ科

有肺類のほとんどは陸生のカタツムリです。でも、カラマツガイは笠形の貝殻を持ち、藻類の生えた岩や護岸に張り付いています。肺で空気呼吸するから有肺類なのですが、同時に鰓も持っていて、水陸両用です。二色の浜突堤では、このカラマツガイが春先に黄色い輪状の卵塊を産んでいる姿を確認できます。緑色の海藻はボタンアオサです。



カラマツガイ

ユリワサビ・・・2020年4月7日、和泉葛城山

目立たない白い花

アブラナ目 アブラナ科

春先に登山道の脇や段差の隅に4弁の白い花を咲かせます。でも、これといった特徴もなく、小さくて目立たないので、気付かない人がいるかもしれません。ワサビと同じ仲間で、冬季に残る葉柄の基部の鱗茎葉が、ユリの百合根に似ることが和名の由来です。茎、葉、および花は、山菜として利用されるそうです。



ユリワサビ

ベルグウミウシ・・・2020年4月16日、二色の浜突堤

紅藻にいる非対称なウミウシ

囊舌目 ハダカモウミウシ科

メバル類の稚魚のためにプランクトンネットを引きに行った時に採集された小さなウミウシです(体長4mm)。紅藻類に付くと言われていています。背側の突起は大きさも位置も不規則なのが不思議です。貝塚市の海岸では初記録ですが、ウミウシ研究の大家である故濱谷巖先生は、遊学館だより第50号において「泉州では採れなくなった」と記しておられました。



ベルグウミウシ

サツマヒメカマキリの幼虫・・・2020年4月30日、千石荘

ススキに鳥の糞?

カマキリ目 ヒメカマキリ科

ススキの葉に鳥のフンでも付いているのかなと思いました。よく見るとサツマヒメカマキリの終齢幼虫でした。この種は幼虫で越冬し、初夏に成虫になります。大阪にすむ他の7種のカマキリは、卵囊内の卵で越冬し、春にふ化し、夏は幼虫、秋に成虫という生活史を送ります。南方系の種で、木塚市内でも目にする機会が増えてきました。



サツマヒメカマキリの幼虫

サツキハゼ・・・2020年5月2日、近木川河口

目のまわりにラメが入る？

スズキ目 クロユリハゼ科

内湾や汽水域のカキ礁に生息する全長 4~5cm の魚です。体側にある黒い縦スジ、光を反射する目の周りのウロコ、および下顎の方が突き出る受け口などが特徴です。観賞用として飼育されることはあっても、食用とされることはありません。これまで二色の浜では記録がありましたが、近木川河口では初めての確認となりました。



サツキハゼ

アカキセワタ・シロウミウシ・カスミミノウミウシ

・・・2020年5月23日、二色の浜

この日、見つけたウミウシ3種

5月に実施した二色の浜のアマモ場での生きもの調査で採集したウミウシ3種です。このなかでアカキセワタが一番小さく、体長は5mmほどです。頭部に触角がなく、頭楯を持ちます。シロウミウシは白地の体色に黒のブチが入り、体の周囲や触角は橙色です。カスミミノウミウシは背面に蕨にみたてた多数の突起があり、触角と口触手が1対ずつあります。



アカキセワタ・カスミミノウミウシ
シロウミウシ

ヤブデマリ・・・2020年5月24日、和泉葛城山

装飾花の初記録種

マツムシソウ目 スイカズラ科

覚野良子さんから花の写真を寄贈していただきました。これまで自然遊学館の記録になかった樹高3~4mの落葉低木です。花序の中央には小さな両性花が集合し、その周りに白色5弁（うち1弁は小さい）の無性花を配置します。このような花は装飾花と呼ばれ、受粉してくれる訪花昆虫を呼び寄せるためと考えられています。



ヤブデマリ
(覚野良子さん撮影)

ヨツモンカメノコハムシ・・・2020年5月26日、橋本

大阪南港と貝塚市だけ？

コウチュウ目 ハムシ科

河添純子さんが5月21日に橋本で見つけたハムシは、これまで府下では南港だけで見つかったヨツモンカメノコハムシという国内外来種、かつヒルガオ科の害虫でした。もしやと思って、28日に三ツ松大橋上流のリュウキュウアサガオ群落に行くと、このハムシが見つかりました。その後の調査で堺市から岬町まで分布が確認されました。



ヨツモンカメノコハムシ

サラサヤンマ・・・2020年6月9日、千石荘

教えてもらってばかり

トンボ目 ヤンマ科

市民と一緒に調査する千石荘講座でも確認されていました。そして、この日も藤村雅志さんに、サラサヤンマがいる場所まで案内してもらいました。3個体のオス成虫が湿地の周囲を飛んでいました。大阪府レッドリストで準絶滅危惧に指定されています。幼虫は湿地に棲み、倒木下の泥のような場所で越冬することもあります。



サラサヤンマ

イツハエトリ・・・2020年6月24日、二色の浜突堤

見逃されていたクモ

クモ目 ハエトリグモ科

プランクトン採集を手伝っている時、突堤の壁でハエトリグモを見つけました。同じ模様のものがたくさんいました。ふと採集して持ち帰り、これまで記録のなかったイツハエトリだと分かりました。普通種を見逃していたのです。虫屋のクモ差別はいただけません。岩礁やテトラでは保護色になりますが、コンクリの壁では丸分かりなのに。



イツハエトリ

ベニトンボ・・・2020年7月2日、馬場

派手な色の外来トンボ

トンボ目 トンボ科

藤村雅志さんから写真を寄贈していただきました。奥出池に2個体のオス成虫がいたそうです。自然遊学館のまとめている市内のトンボリストで78種目となりました。後に分かったことなので、日付は前後しますが、6月24日に秋武仁志さんも馬場で1個体のメス成虫を撮影されていました。元々は中国から東南アジアにかけて分布していた種です。



ベニトンボ
(藤村雅志さん撮影)

ホウロクタケ・・・2020年7月8日、二色・市民の森

イチョウも必死

タマショレイタケ目 ツガサルノコシカケ科

数年前から、市民の森の1本のイチョウから生えているサルノコシカケの仲間です。傘の裏面の管孔の形から、ホウロクタケと分かりました。このイチョウはメスで、銀杏を付けるのですが、その数が少ないのです。よく見ると枝先から出た雌花のほとんどが種子を作らないまま枯れていました。菌糸によって樹勢が弱っているせいかもしれません。



ホウロクタケ

スジチャダイゴケ・・・2020年7月16日、和泉葛城山

鳥の巣に例えられるキノコ

ハラタケ目 チャダイゴケ科

2015年に馬場で見つけて以来の確認です。キノコの仲間、しかもハラタケ目という一般的なキノコ型のものが含まれるグループなのに、コケという名前が付けられています。英語では、胞子塊を鳥の卵に見立てて、bird's nest fungi と呼ばれています。cup fungi でもいいのではと思いますが、それはチャワンタケの仲間当てられていました。



スジチャダイゴケ

サツマゴキブリ・・・2020年7月17日、貝塚人工島

南方系のゴキブリが侵入

ゴキブリ目 マダラゴキブリ科

貝塚市の廃棄物対策課から「二色産業団地に変な虫がいる」と同定依頼を受けた画像を見ると、サツマゴキブリが写っていました。これまで貝塚市で記録がなかったゴキブリです。元々は中国南部から台湾、南西諸島、九州、四国まで分布していたのが、和歌山県まで来ているのは知っていたのですが、大阪南港でも既に記録がありました。



サツマゴキブリ

キノガサタケ・・・2020年7月21日、木積

キノコの女王

スッポントケ目 スッポントケ科

菌網というマントをまとった美しい姿から「キノコの女王」と呼ばれることがあります。梅雨時と秋の年2回、竹林内に生えます。早朝から開き始め、2～3時間で伸び切り、半日ほどで萎んでしまいます。グレバと呼ばれる部位、先端の暗オリーブ色の部分で胞子が作られ、強烈な異臭がします。これも藤村雅志さんの撮影です。



キノガサタケ
(藤村雅志さん撮影)

オオカギバ・・・2020年8月18日、蕎原本谷

なんでそんなに目立つように

チョウ目 カギバガ科

覚野良子さんから、8月9日の写真を寄贈していただきました。これまで見たことがあったのに、自然遊学館に標本がなかった蛾です。その後、本谷に行き、2個体採集することができました。白い翅色なのに、わざと目立つように緑色の葉表にとまっているのが不思議です。幼虫の餌植物はウリノキで、それほど多くない樹木です。



オオカギバ

ツキチョウチョウウオ・・・2020年8月29日、二色の浜
幼魚の見分けは難しい

スズキ目 チョウチョウウオ科

寺田拓真さんからセグロチョウチョウウオ 1 個体と一緒に採集・寄贈していただきました。ナミチョウチョウウオやチョウハンか迷いながら Facebook に投稿すると、詳しい方からツキチョウチョウウオだと教えていただきました。最初はセグロよりおとなしく、餌を食べてくれなかったのですが、マガキを割ってやると、食べてくれました。



ツキチョウチョウウオ

オオフトバムグラ・・・2020年9月16日、二色の浜
一気に増えました

アカネ目 アカネ科

草丈は 10～50cm、葉は対生で、夏にピンクの小さな花を咲かせます。ここ数年、二色の浜の陸側で一気に増えました。北アメリカ原産の外来種で、環境省により、要注意外来生物に指定されています。これまでは同じく北アメリカ原産の外来種で、白い花を咲かせるメリケンムグラの方が多かったのですが、こちらは片隅に追いやられました。



オオフトバムグラ

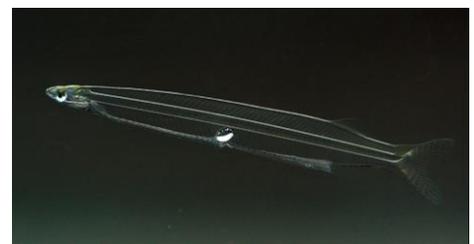
イセゴイのレプトケファルス

・・・2020年9月19日、近木川下流

透明魚

カライワシ目 イセゴイ科

ほとんど透明な体で、2つの目と浮袋だけが目立ちます（全長 2.5cm）。このような透明な幼魚は、カライワシ目やウナギ目で知られています。近木川アユしらべの行事で、採集されたものです。遊学館に戻って調べると、イセゴイの幼魚であることが分かりました。イセゴイは外洋に生息する海水魚ですが、幼魚は汽水域に入って来るそうです。



イセゴイのレプトケファルス

カラスノゴマ・・・2020年9月27日、木積

花のつくりは難しい

アオイ目 アオイ科

8月から9月にかけて黄色い花を咲かせる1年草で、高さ60cmになることもあります。黄色い花の特徴は、長い仮雄蕊(=仮のおしべ)があることです。仮のおしべって?。本当のおしべには花粉を入れる袋である葯と、それを付けるための花糸があるのですが、仮雄蕊には両方ともありません。本当の雄蕊は、仮雄蕊の間に隠れるようにしてあります。



カラスノゴマ

トゲアシヒライソガニモドキ

・・・2020年9月30日、近木川河口

長い名前やなあ

十脚目 モクズガニ科

汽水ワンドの生きもの調査の際に見つかった、大阪では初めての記録と思われる甲幅1cm程のカニです。一見、近木川河口で多く見られるケフサイソガニに似ていますが、歩脚が毛むくじゃらです。よく見ると脚の長節(脚で一番長い節)にトゲがあり、和名もここからついています。



背面



腹面

トゲアシヒライソガニモドキ

タツナミガイ・・・2020年10月28日、二色の浜

突起だらけの海のウサギ

後鰓目 アメフラシ科

アメフラシのように滑らかではなく、突起だらけのやや硬い体をしていますが、同じ仲間です。頭部の前端には一対の頭触手が横に付き出し、小さい眼があり、その後ろに触角があります。背面には2個の穴があり、水の出し入れをして呼吸します。退化した渦巻き状の殻を持ち、その形状から立浪と名付けられました。



殻



タツナミガイ

マツヘリカメムシ・・・2020年10月30日、澤

シックな模様の外来カメムシ

カメムシ目 ヘリカメムシ科

澤在住の方から採集・寄贈していただきました。北アメリカ原産の外来種で、マツ類の新芽や果実から汁液を吸う害虫です。2008年に東京都で初めて見つかリ、関東圏で広がり、現在は、東北地方から西日本の太平洋沿岸まで分布しているようです。大阪府では2014年が初記録でした。よく見るとシックな模様をしています。



マツヘリカメムシ

クロマダラソテツジミ・・・2020年10月30日、脇浜

冬鳥ではなく漂鳥

スズメ目 セキレイ科

元々の分布は東南アジアで、1992年に沖縄に侵入しました。近畿地方では、2008年に突如、大発生し、いったん姿を消して、2017年ごろからポツポツと記録が出始め、最近徐々に記録が増えています。2008年の時は畠中の市役所前のソテツに大量発生しました。2020年はこの他、澤の民家の前の小さなソテツでも確認されました。



クロマダラソテツジミ

タマネギモドキ・・・2020年11月11日、二色・市民の森

ジャガイモのような

イグチ目 ニセショウロ科

自然生態園の土の地面に小さなジャガイモのようなものが埋まっているのを見つけました。市民の森の松林の地面に生える松露のようにも似ています。正体はいかに？答えはタマネギモドキというキノコでした。玉葱のようには見えないのに変な名前です。切ると中は黒いゴマあんのようものがぎっしり入っていました。



断面



タマネギモドキ

ゴクラクハゼ・・・2020年11月25日、自然遊学館

オスが卵塊を保護

スズキ目 ハゼ科

朝、近木川下流水槽内の石に白い卵が万単位でべったりと産み付けられていて、その上に全長10cmを超える大きなオスが陣取っていました。ハゼの仲間はメスが石などに産み付けた卵塊を、オスが保護する習性を持っています。不思議なのは、石の上面に卵が産み付けられていることで、ふつうは浮石の下面に産み付けられるはずなのです。



ゴクラクハゼのオスと卵塊

クリタケ・・・2020年11月26日、蕎原

食用？ 毒キノコ？

スッポントケ目 スッポントケ科

広葉樹の枯れ木の根元に、クリタケが群生していました。晩秋に生えます。傘の径は大きいもので8cmほどになります。傘の裏のヒダは既に紫褐色になっていたもので、老菌になりかけのものでした。従来、『食用でおいしい』とされてきましたが、最近のキノコ図鑑には、『近年有毒成分が抽出され、消化器系障害の可能性あり』と書かれています。



クリタケ

ヒメスミレ・・・2020年12月9日、自然遊学館前

冬のすみれ

キントラノオ目 スミレ科

11月26日、蕎原でモチツツジが咲いていて、オオハナアブが吸蜜に来ていました。12月1日、和泉葛城山の山頂でタチツボスミレの花に、ヤマトシジミが来ていました。いずれも春先に咲く植物です。自然遊学館の前のヒメスミレも遅れじとばかりに咲いて、季節の進み具合がおかしくなっているのかもしれない。



ヒメスミレ

ドブガイ属の一種・・・2020年12月23日、千石荘

がたいのいい二枚貝

イシガイ目 イシガイ科

千石荘のため池の泥底では大きな二枚貝のドブガイ類が見つかっています。これまで見つかったのはほとんどが貝殻でしたが、この日は池の水がひいてあり、生きたドブガイが採れました。貝の中には多くのカイダニ類（体長約2mm）が寄生しているのもみつかりました。



ドブガイ属の一種

マガモとカルガモの雑種

・・・2020年12月28日、近木川河口

通称“マルガモ”

カモ目 カモ科

カルガモの群れの中に、1羽だけ胸が赤褐色の個体がいいて、おやっ！と思ったら、マガモとカルガモの雑種でした。胸の色のほかに、後頭部の緑色、首回りの細い白色の帯などはマガモの特徴です。それに対して、嘴や背中羽根の模様はカルガモの特徴を示しています。同じ *Anas* 属で、雑種の”マルガモ”は時々、見られるそうです。



謝辞

2020年も、多くの方々から、生体、標本、画像を寄贈していただきました。それらのデータは、当館の季刊誌「自然遊学館だより」で公表してきました。それらの中から、今回の特別展では、藤村雅志さん、覚野良子さん、山口隼平さんの資料を使用させていただきました。また、丸山幸代さんからは、二色の浜に打ち上げられた貝殻などを使ったオブジェを寄贈していただきました。近木川、二色の浜、自然生態園でのボランティア作業に参加していただいた方々、行事に参加していただいた方々、講師を勤めていただいた方々も含め、自然遊学館の活動に関わっていただいた方々に改めて、お礼を申し上げます。ありがとうございます。